最優秀賞
— 環境大臣賞 —

蝶の研究から学んだ「自然と共生する福島」の実現方法

福島県立福島高等学校（普通科）・1年　守谷（モリヤ） 和貴（カズキ）

私は小学生の頃から福島県の蝶類を調査している。各地で蝶との出会いがあり、感銘を受け、それぞれが思い出深い場所だ。

福島の自然が好きだという人は多いと思う。レジャー施設なども魅力的ではあるが、これからの新しい福島を作り上げるには、飾らない自然環境を元手とした「自然と共生する福島」を実現するべきだと考える。昆虫採集にこだわる必要はない。釣り、山菜取り、登山、天体観測など、大自然の中で楽しめる事はたくさんある。

しかし、県内の自然環境はここ30年ほどで著しく悪化し、特に原子力災害以降顕著になった。それは多くの研究で言われているが、私自身も調査を通して痛感している。よく蝶は「自然のバロメーター」と言われる。過去の記録と照らし合わせ調査を行っても、記録のあった蝶が全く見られないことはよくある。蝶の消失は、そこの自然環境に何らかの変化があったということなのだ。そして、その変化は大抵が人間の影響によるものだ。原因は大きく2つ考えられる。

1つは、直接的な環境破壊がある。例えば、過剰な森林伐採や開発だ。蝶が食べる植物ごと失われてしまうため、影響は短期間に現れる。今の福島県で最も深刻な要因は、再生可能エネルギーの急激な開発だろう。原子力災害以降、県内の再生可能エネルギーの進展はすさまじい。再生可能エネルギー自体は賛成であるが、現在のやり方には問題があると考える。広大な山林を切り開いて太陽光発電や風力発電を建設する光景は目に余るものがある。それは有限の自然環境ありきのエネルギー生産であり、開発後には自然環境の再生ができないことに問題があるのだ。

もう1つは、森林管理の放棄による良好な自然環境の衰退である。過疎化により、森林が荒れ果て、生息環境が悪化し、絶滅に追い込まれる生物が出ている。例えば、原子力災害によって一時立ち入りできなくなった浜通りの山林では、荒れ放題の場所が生じている。蝶には、特定の食草・食樹が存在し、それらがないと生息できない。種によっては成虫が好む環境があり、開けた草原などを生息環境とする蝶類にとっては計り知れない影響がある。

そこで、自然環境を保全する方法を考える必要がある。例えば、既存の建築物や空き地に太陽光パネルを設置したり、風車を小型化し各世帯の屋根や道路沿いなどに設置したりするなど、自然環境にすぐ手を伸ばさず、身近な都市環境で最大限の工夫をすることにより、自然環境を保全するべきである。農村部では、良好な自然環境を維持するための適切な管理を継続する必要がある。例えば、杉や檜などの県内産樹木の需要喚起だ。適切な管理を行い、森林荒廃を防ぎ、かつ地域の貴重な経済資源として活用する。また、天然の草原を利用し、地形を生かした牧場やスキー場などに活用することで、広大な面積の山林の開発を防ぐことができる。また、自治体は自然環境管理を専門とする地方公社を組織し、管理者を雇う。自然環境のエキスパートを育成し、管理が行き届くようにする。各自治体で取り組みを始めれば、かなりの雇用ができ、ポスト・コロナ社会の失業者増大、さらに過疎化も解消する。また、農村生活や狩猟・採集など、自然の営みの体験型プログラムを実施することで、次世代へ自然環境の特性と地元住民の生活を継承する。さらに集客にもつながるため、地域の経済活性化が見込める。

このような取り組みによる自然環境の維持によって生き延びることができるようになる生物は、蝶をはじめとして無数に存在する。

自然と共生するにはまだ課題がたくさんある。しかし、原子力災害を経験したこの10年間で広範囲な課題に対する解決力が培われたはずだ。今こそ、都市での再生可能エネルギー生産への切り替え、今ある自然環境の保全、その魅力を最大限に生かした観光資源の創出によって、「自然と共生する福島」の実現のため、行動を起こすべき時である。